

ミシェル・ヴィノック著

塚原史・立花英裕・築山和也・久保昭博訳

## 『知識人の時代 バレス／ジッド／サルトル』

紀伊國屋書店 二〇〇七年

弓削 尚子

### I

いわゆる狭義の思想史ではなく、知の担い手や学術組織のあり方に社会史的な関心を向けて歴史を編む試みは、たとえばイギリスのピーター・バークによる『知識の社会史』などが知られている。そこでは、社会史が「社会のなかで知識として通用しているものすべてに関心を払わなければならない」と宣言され、「知識」が歴史学の対象になりうることを確認されている。

これにかわって、『知識人の時代』と銘打つ本書は、「知識人」そのものもまた歴史学の対象となることを証している。ただし本書は、フランスの思想家たちを寄せ集めた偉人史ではない。著者ヴィノックは、モーリス・バレス（一八六二―一九三三）、アンドレ・ジッド（一八六九―一九五二）、ジャン＝ポール・サルトル（一九〇五―一九八〇）という各時代に輝いた巨星を選び、一九世紀末から二〇世紀後半までの時代のマクロな趨勢を追いつつ、巨星を取り巻く大小さまざまな星のごとく存在した二〇〇〇名を超える知識人たちのミクロな次元をつぶさに見ている。

その手法は、ミクロ・ヒストリーかマクロ・ヒストリーかという二者択一を超えるものである。なぜなら、ドレフュス事件、二つの世界大戦、戦後社会というフランス近現代史の大きな文様を浮かび上がらせるとともに、それぞれの文様を構成する網目のような人間関係を緻密に復元しているからである。一見、瑣末的な知識人同士のやりとりをも掘り取り、大きな歴史の流れに直結させ

ている。たとえば、短期間しか刊行されなかった雑誌の編集長が、一瞬、舞台を横切るエキストラのように登場する。そうした「端役」も見逃さない著者の目線は、知識人の活動にとって出版メディアがかけがえのない価値をもっていることを再確認するとともに、知識人と公共性の関係を徹底的に追究する姿勢に裏打ちされたものである。それによって、ある時代の思想が、その時代の現実はどう向き合い、どう関わったのかという断面が鮮やかに切り出されることになった。

読者は、まず、六二章、八〇〇頁に及ぶ本書の分量に圧倒されるが、この歴史書を読み進めていくうちに、博覧強記で鳴る著者が描き出す重層的かつ卓越した世界に感銘を受けることになるだろう。

## II

ところで、「知識人」を歴史学の対象とする困難さは、歴史家自身が、おのれの知識人としてのあり様を問われることと大いに関係があるだろう。「知識人」とはアン

ガージュマン（政治参加）する者であるという定式は、現代の歴史家ヴィノックとて逃れることはできない。もちろん、一九世紀末のドレフュス事件において誕生したとされる「知識人」像は、「神託を告げる知識人の時代は終わった」（ピエール・ノラ）とされる現代の「知識人」像とは異なっている。

ユダヤ系将校ドレフュスの有罪か無罪かをめぐる事件は、フランス第三共和国を揺るがす最大の政治危機に発展した。反ユダヤ主義、軍の権威、人権問題をめぐって大論陣が張られ、既成の党派の枠から独立して政治参加をする知識人勢力が登場した。ドレフュスが最終的には無罪となり、レジオン・ドヌール勲章を授けられるまでに名誉回復されたことで事件は解決を見るが、「知識人」の系譜はここから始まっていくことになる。

興味深いのは、著者がこの時代の象徴をバレスに見たことである。彼は、ドレフュス事件では軍部の立場に立ち、その意味においては事件の「敗者」陣営にあった。しかし、バレスは、知識人主導の国粋主義の土台を築

き、若者を魅了する「当時、最も影響力のある作家」であることに間違いなかった。二〇世紀後半では、その反ユダヤ主義的姿勢と「外国人嫌い」から、バレスの評価は決して高くないようだが、歴史家ヴィノックは、これに弄されることなく当時の思潮を見据え、「私は弾劾する」とドレフュス派を率いたゾラではなく、バレスを選択した。実際、バレスが知識人として切り拓いたナシヨナリズムや反ユダヤ主義の大河は、ドレフュス事件以降、国際情勢にも押され、大きなうねりとなってフランス社会を洗っていくことになる。

バレスは政治家になり、名実ともにアンガージュマンする知識人となったが、「知識人」の系譜は、一九二七年に発表されたジュリアン・バンダ（一八六七―一九五六）の『知識人の裏切り』の主張により、一旦、再考を迫られる。一八世紀啓蒙主義を牽引した「知識人＝フィロゾフ」を研究対象としている評者にとっては、このバンダの主張は、知識人の歴史を考える上で看過できないものがある。

バンダによると、かつて知識人（クレール＝聖職者）とは、「実際の結果を直接の目的としない文人、芸術家、科学者」のことであった。彼らは、「私利私欲のない活動に専念することで政治に背を向けるか、あるいは人間性や正義の名のもとに、政治的情熱とは直接対立する、より上位の抽象的原則を擁護する思想を説いた。ところが、バレスをはじめ昨今の知識人たちは、「人種的情熱、階級的情熱、国家〔民族〕的情熱」に駆られ、普遍的真理の擁護よりも、自らの熱い血をもって「現世主義を理想化」する風潮にあるという。

バンダの主張は、知識人（アンテレクチュエル）のアンガージュマン批判というより、その方向性を見極めるための警鐘と捉えたほうがよいであろう。その警鐘は、戦後社会のフランスにおいては、とりわけ共産主義や植民地主義に鳴らされるべきものであった。とくに、朝鮮戦争とアルジェリア戦争をヴィノックは取り上げる。

一九五〇年に勃発した朝鮮戦争は、フランスにおいても知識人たちにイデオロギー論争を巻き起こした。その

中で、レーモン・アロン（一九〇五—八三）は、アンガール・ジュマンの方向性を見極めた知識人として傑出している。第二次世界大戦後、左翼知識人たちは、一時期、熱狂的な共産主義の「同伴者」となった。サルトルが憎悪をむき出しにして「反共主義者はみな犬だ」と口から火を吹いたように、左翼知識人陣営は、反資本主義と社会主義的世界観を徹底させ、スターリンの粛清を含めて「ソビエト体制の根源的な悪の直視を不可能に」した。

そんな風潮の中、アロンは、資本主義体制の歪みを認識し、アメリカ批判を怠らないものの、冷徹な共産主義批判を展開した。彼は、ソビエト体制を「じつは自由の扼殺と軍事的帝国主義をカモフラージュするためのペテンなのだ」と切って捨て、「地球征服」をめざすソビエトの教義に対して、「全力で抵抗すること、それが自由な人間にとっての、知識人にとっての、使命である」と主張した。共産主義批判、ソビエト批判を毅然と行うアロンの骨太な精神は、植民地支配への憤懣を『コンゴ紀行』（一九二七）で表現し、『ソビエト旅行記』（一九三

六）で、ソビエトの全体主義を「ヒトラーのドイツ以上」と評したジッドとともに、読み手に強い印象を与える。

やがて続くアルジェリア戦争は、「知識人を表舞台に立たせ」、ドレフュス事件を彷彿とさせる事態となった。スターリンの影を引きずる共産党に見切りをつけた左翼知識人たちは団結してアルジェリア戦争への「不服従権利宣言」を出す。これに対抗して「フランスのアルジェリア」を唱える右翼知識人たちの中には、ファシストや国家主義カトリックらの姿も散見された。著者は、アルジェリアとの講和をもたらしたのは、左翼知識人ではなく、ドゴールと断じているが、いずれにしても知識人たちは、フランスの植民地主義の清算という大きな問題に直面して、アンガール・ジュマンの確かな方向性を見出していたわけではなかった。一九六二年のアルジェリア独立までの激しい対立は、右派、左派を問わず、フランス知識人たちに深い「苦悶」を与えていた。旗幟を鮮明にして政治的活動を行うことは、当然ながら、知識人たちに

多大なエネルギーと社会的責任を要求し、容易ならざる選択の積み重ねを強いる。

### III

次に、評者の専門との関係から、ドイツとの文脈において若干論じておきたい。後発の国民国家であるドイツは、そのアイデンティティ形成に対仏意識があった。一九世紀初頭、ナポレオン率いるフランス軍によって占領されたベルリンにおいて、「ドイツ国民に告ぐ」と聴衆に訴え、愛国心を奮い立たせた哲学者フィヒテは、ある意味でアンガージュマンする知識人であった。近現代のフランス「知識人」は、ドイツをどのように見ていたのだろうか。

本書によると、一九〇五年のモロッコ危機以降、フランスの政治に「ドイツという脅迫観念が常につきまとった」とされる。フランスの植民地に、ドイツが介入してきたことは、フランス社会に動揺を走らせた。そこでは、一世紀前のナポレオン戦争時にドイツで見られた国

家アイデンティティの危機が、裏返しとなって現れている。フランスは「大革命の聖域」、「自由の聖なる地」であり、「ゲルマン的野蠻から守るべき」である。こうした発想は、アナトール・フランスやアンリ・ベルクソンにも見られ、フランスの文明、あるいは「勇氣と知性に満ちた勇敢さ」に、ドイツ的野蠻が対置されているのである。まさに、バレスの時代である。その愛国主義は激しく、「人間性や宗教よりも上におかれている」勢いがあった。

一九三〇年代に入り、ナチズムが政権を掌握すると、「現在進行中の途方もなく不合理なこと」（ロジェ・マルタン・デュ・ガール）に対するフランス知識人の抗議や憤り、そして批判が噴出した。フランスでは早くから人民戦線が成立し、反ファシズム運動が活発となるが、反・反ファシズム勢力も強く、著者によると、知識人たちはドレフュス事件最盛期のように陣営を分かť論争が起こった。

対独協力者の一人であるロベール・ブラジャック（一

九〇九（四五）のストーリーは、知識人の社会的責任の重さを示す点で強烈である。ブラジャックは、「理性的反ユダヤ主義」ともいふべき態度をとりながら、「全体主義革命」を目指した文学者で、三五歳のときに対独協力のかどで死刑を求刑された。恩赦を求める運動も展開されたが、「ドイツに奉仕」した者への社会的怨嗟の声を背景に、極刑は最終的に執行されることになる。ブラジャックの行為は「知識人の裏切り」であり、知識人の「影響ある言葉は、武器と同様に、人を死へと追いやるもの」として裁かれた。「知識人」の政治への責任を訴えたサルトルは、言葉は「装填された拳銃」であると述べたが、それならば、「知識人」は装填された拳銃を持ち歩き、なおそれを使う責任をもつということであろうか。一九六〇年代にシモーヌ・ド・ボーヴォワールが、ブラジャックに触れてこう語っている。「言葉はガス室に劣らない殺傷力を帯びることがある」。

ブラジャックの行為は、果たして「知識人の裏切り」なのだろうか。ユダヤ人ジェノサイドが思考の枠外に置

かれた場合、多くは対独協力者であろうと反ファシズム派であろうと、両者の底流には「フランスへの愛」が共有されていた。ブラジャックはじめ、対独協力者たちは、「フランスの保持と栄光のため」、彼らなりのアンガージュマンをした。同時代の文脈の中で、その不正の見極めはやはり難しい。

第二次世界大戦後、世界を覆いつくす巨大な冷戦構造の中で、フランスにおける対独意識は、たとえばユダヤ人をめぐる問題に垣間見られる。反ユダヤ主義は、「ドイツに特有の問題」という意識が醸成され、等閑視される一方、中東問題においては、イスラエルに対して、「かつてヒトラーの犠牲となった人たち」を支援するという動きも見られた。アラブ諸国や大国アメリカとの込み入った権力関係と世界戦略の中で、フランス知識人たちのアンガージュマンは、錯綜した情報分析を迫られつつ展開している。

## IV

本書は、評者のように、まがりなりにも「知識」を職業として生きる人間にとって、自らの知的活動を見つめ、問い直す刺激を与える作品である。少なくとも、サルトル全盛の「末期」に生まれた評者にとって、このような刺激が、本書を読破した最大の収穫であった。アンドレ・マルローが「知識人は単に教養のある人間なのではない。その教養に、明晰な行動を結びつけねばならないのである」と述べ、サルトルが「作家のひとは影響力をもっている。彼〔作家〕の沈黙も同様である」と言い切る姿勢には、時代を超える迫力を感じる。

一九七〇年代、サルトルに代わって時代の精神を牽引したのはミシェル・フーコー（一九二六―八四）である。サルトルがアンガージュマンを始めた頃の問題意識は、一九六八年という一つの画期を経て、過去のものとなっていた。フーコーは、監獄、狂気、ジェンダーやセクシュアリティに基づく差別など、社会の規範化とその抑

圧構造の分析に着手した。そのテーマの広がり示されるように、著者ヴィノックは、サルトルの時代に比して、闘争は多元化し、異議申し立ては多様化したと主張する。ジェンダー史を専門としている評者自らの立ち位置を考えれば、フーコー以降の知の潮流に身を置いていることを実感せざるを得ない。だからこそ、サルトル以前の歴史が新鮮にも思え、「知識」を職業とする者としての自覚を促されることにもなった。

しかし、著者ヴィノックは、レーモン・アロン以降、「知識人の終わり」を告げている。その意図するところは、「政治にかかわりつづけるだろうが、立派な思想の背景に隊列を組むのではなく、自分自身の能力と確信によって、個人的レベルの懷疑を抱きながら」行動する知識人像である。これは、かつての「確固としたイデオロギーを背景に、結束し、行動する知識人」の矮小化なのだろうか。そうではないのだろうか。知識人もまた、歴史の変数として時代とともに姿を変え続ける「無力な存在」である。むしろ、その無力さを自覚しつつ、どの時

代の知識人にも、「立派な思想」が取りこぼしている無数の問題に対峙する可能性と「責任」が潜んでいると思うのである。